

「男、突っ走る！」

第32回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (19)

名古屋芸術専門学校 1年生

木内 孝志 (48)

雅也の父

眞榮田 浩平 (19)

名古屋芸術専門学校 1年生

福沢 瑞枝 (19)

名古屋芸術専門学校 1年生

長井 夏美 (19)

名古屋芸術専門学校 1年生

加藤 直也 (19)

名古屋芸術専門学校 1年生

大久保 正樹 (23)

名古屋芸術専門学校 1年生

船倉 篤志 (19)

名古屋芸術専門学校 1年生

奥村 裕志 (20)

名古屋芸術専門学校 1年生

野添 美南 (20)

名古屋芸術専門学校 1年生

山口 拓海 (19)

名古屋芸術専門学校 1年生

安永 和也 (19)

名古屋芸術専門学校 1年生

渡部 康太 (39)

名古屋芸術専門学校 教務課長

鈴木 孝雄 (52)

名古屋芸術専門学校 入学事務局員

吉野 茉由 (25)

名古屋芸術専門学校 入学事務局員

鈴木 貴広 (44)

名古屋芸術専門学校 講師

藤本 朝香 (54)

名古屋芸術専門学校 講師

堀江 朝日 (35)

名古屋芸術専門学校 講師

堀内 泰正 (58)

名古屋芸術専門学校 講師

山浦 重幸 (58)

名古屋芸術専門学校 講師

1 名古屋芸術専門学校・1階・ロビー

雅也が登校してくる――あくびをしな
がら、エレベーターのボタンを押す。

奥の事務局室から、吉野が出てくる。

吉野「おはよう、木内君」

雅也「おはようございます」

吉野「眠たいの？」

雅也「朝七時代の電車に乗らないと、一時間
目には間に合いませんからね。どうも朝
が弱くて」

吉野「そのうち慣れるわよ、そういう生活も」

雅也「入学してから一ヶ月経つのに、未だに
慣れなくて」

また大きなあくびをする雅也。

2 同・5階・502教室

美南が小説を読んでいる――雅也が入
ってくる。

雅也「おはよう、ナミ」

美南「うっちー、おはよう」

雅也「良いね、ゆっくり小説読む時間があつて」

美南「電車の中で読まないの？」

雅也「満員電車の中で、読めるわけないですよ」

美南「それもそうか」

雅也「学校から近行って良いね」

美南「まあ、地下鉄の駅七つ過ぎれば、栄駅着くからね」

雅也「地下鉄だったら、本数も多いもんね」

美南「最寄り駅、電車の本数少ないの？」

雅也「朝は一時間に三本。日中は三十分一本」

美南「少ないね」

雅也「でしょ。だから、一本逃したら遅刻確定なの。だから、常に時間との闘い」

美南「一時間目からの授業だったら、しょうがないけど、お昼からの授業だったらもう少しゆっくり来ても良いんじゃない？」

雅也「そうしたいけどさ、学園祭まであと一

ヶ月なんだよ。準備だってこれから本格的に始まるから、そうゆっくりはしてられないでしょ」

美南「駄菓子屋の準備は、私が仕切るから任せといて。お化け屋敷の準備だってあるんでしょ？」

雅也「うん。ナミが仕切ってくれたら、助かるわ。けどやっぱり、両方掛け持ちはキツかったかな」

美南「大丈夫だって」

雅也「そうかな」

美南「楽しみなさいよ、学校行事なんだから」

雅也「だね」

と、山浦が入ってくる。

山浦「おはようございます」

雅也・美南「おはようございます」

山浦、原稿を雅也に渡すと、

山浦「原稿の添削、返しますね」

雅也「ありがとうございます」

山浦「（原稿を見ながら）ト書きの書き方を、

まずは統一しましょう」

雅也「はい」

山浦「あと、それから……」

美南、その雅也の様子を見て微笑んでいる。
いる。

3 同・屋上

雅也が一人で弁当を食べている——と、
ドアが開き、裕司と篤志が入ってくる。

裕司「あれ、うちーじゃん」

雅也「お疲れ、おっくー」

裕司「（篤志に）シナリオ専攻のうちー。

（と雅也に）俺と同じゲームプランナーの
あつぽん」

雅也「シナリオライター専攻の木内です」

篤志「ゲームプランナー専攻の船倉です」

裕司「うちー、そういえば学園祭のお化け

屋敷の実行委員入ってたよね？」

雅也「うん」

裕司「じゃあ、話は早いわ。あつぽんもお化

け屋敷の実行委員だから、よろしく」

雅也「そうなんだ」

篤志「まあ、バイトとかもあつてなかなか顔出せないと思うけど」

雅也「それはしょうがないよ。実はこっちも、小説専攻とシナリオ専攻は駄菓子屋をやるんだけど、その準備もあつて、俺もなかなか行けてないの」

裕司「そうかな。結構うちー来てると思うけど」

雅也「まあ、できるだけ顔出すようにはしてるからね。だって、他の専攻の人となんてさ、こういう時じゃないと一緒に何かできないと思うし」

裕司「いや、いずれ専攻を超えたコラボで何か一緒に作品を作ることだってあるかもしれないぞ（と煙草を吸い始める）」

雅也「それができたら良いよね」

篤志「その時は、俺もぜひ」

雅也「うん。（と篤志に）あ、えっと、あつ

ぽんって呼べば良いんだっけ？」

篤志「ぜひ！」

雅也「俺のことは、気軽にうちーって呼んでね」

と、笑って返す。

4 同・4階・廊下

プリンターから出力した書類を束ねている雅也——401教室から、直也が出てくる。

直也「ういつす」

雅也「あ、お疲れ。加藤君」

直也「原稿？」

雅也「ううん。駄菓子屋の準備」

直也「駄菓子屋？」

雅也「ほら、うちの文章系、学園祭で駄菓子屋やるでしょ。明後日、ミーティングするからさ、その準備」

直也「俺たちと一緒に化け屋敷もやるんだろ？」

雅也「もちろんやるよ」

直也「掛け持ちなんて、よくやるな」

雅也「駄菓子屋は文章系のメインで毎年や
てるらしいから。お化け屋敷はさ、人も多
いから、俺への負担は少ないと思うし。バ
ランスよくやるよ」

直也「いつまで、そんな呑気なこと言ってら
れるかな」

雅也「どういう意味？」

直也「俺、高校の時に何回もここに体験入学
に来てるから分かるんだけど、イベントご
とになって本番が近くなるたびに、みんな
ピリつくんだよ」

雅也「変な事言わないでよ」

直也「先輩から聞いたから、間違いないよ」

雅也「何でピリつく必要があるんだろうね。
楽しいイベントを作るのに、そんなピリつ
いたら準備してるほうだって楽しくないで
しょ」

直也「単なる理想だよ、そういうのは」

雅也「……」

直也「（書類を見て）あ、俺のやつが混ざってる」

雅也「あ、これ？（とプリントを渡す）」

直也「ありがと。じゃ」

と、部屋に戻っていく——雅也、呆然とした顔で見送る。

5 夜の道を走る乗用車

6 その車の中

運転をしている孝志——助手席で眠そうにしている雅也。

孝志「疲れたのか？」

雅也「まあね。学校は別に良いと思うんだけど、どうも片道一時間半の電車通学っていう環境がね……」

孝志「最初はそういうもんだ。環境に慣れる時間は、それぞれ個人差があるからな」

雅也「うん」

ゆつくりと目をつむる雅也。

7 名古屋芸術専門学校・4階・402教

室

雅也と美南が、学生たちに書類を配布している――側に堀内と藤堂。

雅也「駄菓子屋企画についてですが、ただ駄菓子を販売するだけではなく、より文章系の雰囲気を出すために、駄菓子をテーマにした短編小説を作りたいと思います」

美南「各自、短編小説を書いた後、イラストレーターを使って編集をして、小冊子にして当日、駄菓子と一緒に展示をします」

堀内「入学当初から授業で話しているとおり、皆さんは小説を本にする上での編集の話をしています。入学してからのこの約二ヶ月で学んだことを発揮できる機会だと思っていますので、ぜひ作っていただきたい」

藤堂「タイトルのつけ方や、イラストレーター
の簡単な操作方法だったら私も分かるの

で、そこはフォロー入ります。この後の私の授業も、学園祭の準備の時間として使っていただけで構いません。コピーライティングの授業なので、当日掲示するポップや張り紙を考えるのも良いと思います」

雅也「ありがとうございます」

美南「ありがとうございます」

堀内「よし、じゃあ早速駄菓子屋の準備に向けて、木内と野添を中心に動いてください」

雅也「では皆さん、よろしくお願いします」

それぞれパソコンで文字を打ち始めていく学生たち。お互い頷く雅也と美南。

8 同・4階・廊下

雅也が弁当箱を持って402教室から出てくる——夏美と瑞枝が、弁当を食べている。

夏美「うっちー、お疲れ」

瑞枝「あ、癒しのうっちーだ！」

雅也「なっちゃん、みずちゃん、お疲れ」

夏美「今からご飯？」

雅也「うん。屋上で食べようかと思って」

夏美「ここで食べれば良いじゃん。眞榮田た

ちも、今コンビニ行ってるけど、もう少し

したら戻ってくるよ」

雅也「狭くならないかな？」

瑞枝「大丈夫だよ」

雅也「じゃあ、ここで食べよう」

と、ベンチに座って、弁当箱を開ける

と食べ始める。

雅也「ねえ、加藤君って、どんな子？」

瑞枝「どんな子？」

夏美「まあ、意識高い系かな」

雅也「ああ、なるほどね」

瑞枝「何かあったの？」

雅也「（苦笑して）いや、別に。まだあまり

がつつり関わってないからさ、どういう子

なのかなと思って」

と、エレベーターが開き、浩平が出て

くる。

浩平「お、うちーがいるじゃん」

雅也「何、眞榮田君。俺がいるのが、そんなに珍しい？」

浩平「四階にいついるか分からないから」

雅也「そっか。水曜日は四階で授業なんだけど、後はほとんど五階。だから、こうやってみんなと顔合わせるのは水曜ぐらいかな」

浩平「そんな冷たいこと。昼飯食うときだけ、四階に降りてれば良いんだよ」

雅也「良いの？」

浩平「もちろん」

雅也「じゃあ、四階来るようにする。(と周囲を見回し) あれ、加藤君と大久保君は？」

浩平「加藤はまだコンビニじゃねえか？ 大

久保は、多分屋上で喫煙中」

9 同・屋上

正樹と鈴木と渡部が喫煙スペースで煙草を吸っている。

鈴木「どうだ、映像科のメンツとは仲良くな

れたか」

正樹「まあ、何とかですけどね。自分だけ四つ上なので、年齢の壁がどうしても」

渡部「年齢なんて関係ないって。大学行っただ時もそうだったんじゃないのか？」

正樹「まあそうなんですけどね。頑張っ、この環境に慣れるようにします」

鈴木「年上だから、頼られることだってあるかもしれないからな。そこはお前の武器だと思っぞ」

正樹「武器になりますかねえ（と笑う）」

10 同・4階・廊下

弁当を食べている雅也、浩平、夏美、瑞枝。

雅也「そっか、大久保君って四つ上になるんだ。オリエンテーションの時、年上だって感じはしてたし、前に大学に通ってたって話してたもんね」

浩平「まあ、別にどうでも良いんだけどな」

と、浩平の携帯電話が鳴る。

浩平「バイト先からだ。（と電話に出て）はい、もしもし」

と、話しながら階段を下りていく。

雅也「（夏美と瑞枝に）ねえ、映像科の男子たちって仲悪いの？」

夏美「どうかな。まあ、少なくとも加藤と眞榮田は勝手にお互いをライバル視してるし、大久保君はあの通りちよっと大人だから一歩引いた感じなんだよね」

雅也「へえ」

瑞枝「文章系はどんなの？」

雅也「うちの専攻も、一つ上のナミがいたり、他にも年上の人だって何人もいるけど、別に普通だよ。文章だからさ、みんな個人プレイだけど、いざみんなで何かをやるうってなったら、ちゃんとやってくれるし」

瑞枝「それは、うちーがいるからだよ」

雅也「どういうこと？」

瑞枝「うちーがいたら、まとまりそうだも

ん」

雅也「そうかな。これまで、何だかんだリーダーとか学級代表とかやってきたけど、本当はあまりそういう先頭に立つの好きじゃないんだよね」

夏美「でも似合いそう、そういうの」

雅也「やりたくないけど、やっちゃうんだよねえ」

瑞枝「一専攻に一人、うちーがいるね」

夏美「言えてる」

雅也「そんな、一家に一台のテレビみたいに言わないでよ」

笑い合う雅也、夏美、瑞枝。

11 同・1階・入学事務局室

吉野が仕事をしている――ドアが開き、鈴島が入ってくると、

鈴島「吉野さん」

吉野「はい」

鈴島「体験入学の学生スタッフの件、一年生

にはいつ頃から始めてもらおうか？」

吉野「学園祭が終わった後の六月中旬ぐらいにスタートしようかと思ってます」

鈴島「じゃあ、スタッフになるための勉強会の開催日程を決めて、学生たちにメールで案内してあげてください」

吉野「分かりました」

鈴島「お願いします」

吉野、パソコンを見ながら仕事を進める。

12 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也がパソコンで小説を書いている――上手く書けないようで、何度も手が止まっている。

雅也「書けない……」

と、大きな溜息をつく。

13 名古屋芸術専門学校・全景（翌日）

学生たちが、それぞれパソコンで原稿を書いている——雅也、自分の原稿を

堀江に見せている。

堀江「木内さんは、シナリオでスタートして
るから、まだどうしても書き方も場面転換
も、シナリオみたいになってますね」

雅也「昨日も遅くまで家で書いてたんですけ
ど、なかなか上手く書けなくて」

堀江「一人称で書いてみたらどうですか？」

雅也「ああ、私は〇〇と思った、っていう書
き方ですよ」

堀江「そう。初心者の方が三人称一元視点で
書こうと思うと、どうしても視点がズレて、
誰目線で書いているのか分からなくなっ
てしまってます。当然三人称視点の小説は、世
の中にたくさんありますが、まだ小説執筆
経験の浅い木内さんにとっては結構ハード
ルが高いと思います。一人称だったら、自
分視点で物語が進むので、比較的書きやす

いと思います。内容は問題ないと思うので、後は視点を意識して直してみてください」

雅也「はい、ありがとうございます」

と、険しい顔で原稿を読み始める。

15 同・8階・プレゼンテーションルーム

雅也、夏美、瑞枝がお化粧屋敷の準備をしている――と、裕司と同級生・山口拓海（19）、学生の何人かが同級生・安永和也（19）にメイクを施している。

裕司「やつすー、女子メイク似合うなあ」

和也「そうかなあ」

拓海「普段、ゲームプログラマー専攻とは思えない。（と木内たちに）うちーたちも、メイクやってみたら？」

夏美「ぐっち、変な事言わないでよ」

拓海「だって、みんな当日お化粧役やるんだつたら、メイクがちゃんと肌に合うのか試さない」と

瑞枝「まあ、それもそうか」

雅也「やっぱり、ぐっちだね。コミックイラ

スト専攻だけあって、色の使い方が上手い」

拓海「うちーにそう言われると嬉しいな」

雅也「俺も、ぐっちにメイクしてもらおうかな」

16 同・同・廊下

白い顔になっている雅也、夏美、瑞枝

が菓子パンを持って出てくる——ベン

チに座り、それぞれ食べ始めながら、

夏美「うちー、京都の貴族みたいだよ」

雅也「こんな風になるなんて思わなかった」

瑞枝「マロだね、マロ。似合ってるよ」

雅也「でもお化け感なかったら、ダメじゃん」

夏美「まあ、それでも良いんじゃない」

と、裕司が出てくると、

裕司「うちー、携帯鳴ってる」

と、雅也に渡すと部屋に戻っていく。

雅也「ありがとう。(と電話に出ると)もし

もし、母さん。どうしたの。いや、まだ学校だけど。え……！？ 分かった、帰ったら詳しく聞くわ。じゃあ（と電話を切る）」

夏美「何かあったの？」

雅也「今さ、中三の弟が修学旅行で東京に行ってるんだけど、そのバスが向こうで事故ったって」

瑞枝「え？」

夏美「早く帰った方が良いんじゃない」

雅也「そうだね」

夏美「ああ、ちよつと。メイク落とさなきゃ」

雅也「あ、そっか」

と、男子トイレに入っていく。

17 同・同・男子トイレ

雅也、水道でメイクを落としている。

雅也「健、大丈夫かな」

不安な顔の雅也である。

つづく